
真 恋姫†夢想 三国演義

紳士な兄と幼女性癖

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真 恋姫†夢想 三国演義

【Nコード】

N5674Q

【作者名】

紳士な兄と幼女性癖

【あらすじ】

「暇だー！ー！」

――北郷一刀は、暇を持て余していた。

「ご主人様、暇なのは良いことじゃないですかー？」

と、桃香。

「そうだ、演劇をしよう!!」

そんな、京都へいこう。みたいなニュアンスで提案した一刀。

「演劇？まあ悪くないわね」

これは華琳。

これから始まる物語……

「えーなになに？面白そうじゃない？」

そして雪蓮。

三国統一後……暇な武将達による演劇が……

「じゃあ、舞台作ってもらおっか……」

開幕――

※キャラ崩壊は許してね☆

しらゆきひめ1

むかーしむかしの話です。

あるお城に、華琳というそれはそれは美少女の魔女がおりました。

「暇だわ……暇潰しに鏡とでもお話しましょうか」

そんなちよつとというか割と痛い事をいはじめた華琳さんは鏡の前に立ち、鏡に魔法をかけました。

「……………」

どうしたんですか、華琳さん。貴女の台詞ですよ？

「ち……ち、ちちんぷいぷいちちんぷーい、鏡よ鏡よ鏡さん、この世で1番綺麗なのはだーれ☆？……………か、一刀、こ、殺す」

すると鏡が答えました。

「うむ！よくぞきいてくれたぞ。もちろんわらわなのじゃ」

鏡の中のツインテールにして華琳さんと同じ恰好をした美羽さんを無視し、華琳さんは納得しました。

「やはりね、鏡の中の貴女が1番美しいなら本体の私が美しいということなのね」

「な、なんじゃと……？」

むー、と唸った美羽さんは変な事を言い始めました。

「今のは嘘じゃ。この世で1番美しいのは山のふもとに住んでおるとーか、というやつでの」

華琳は確かめる様に口を開いた。

「本当に、本当にこの私より美しいというの？」

「もちろんじゃ。お主みたいなちんちくりんではないし、おっぱいもお主みたいに残念ではない、特大のももまんを仕込んだかのごとき大きさあるでの」

「おまけに、せーじんくんと呼ぶにふさわしい性格での、野心にみちあふれたおぬしとは、まさにつきとすっぽんなのじゃ」

華琳が鏡を叩き割った。

ぴぎい。と鏡の向こうから声がしたが、気のせいだろう。

「山のふもとのとうか、まってなさい……イマ、殺シニいくからネ
???:……………」

——トントン。

桃香は、戸が叩かれたので急いで向かった。

「はいはい、どちら様ですかあ？」

扉を開けると、いかにも魔女ですよゝ的なオーラを放っている人が立っていた。

全身黒。マントをはおい、頭には三角帽。これを魔女といわなければただの厨二病。としかいえない、そんな雰囲気 of 魔女に桃香は話しかけた。

「どうされたんですかー？」

「いやいや、旅の商人なのですが、果物はいかがですか？」

「果物？おいしいんですかー」

「この美味さ、食べてみらんとわからんわからん。ほれ」

そういつてりんごを差し出した華琳。
受け取る桃香。そのままかじりつく。

むしゃむしゃ。

「……ん!？」

膝から崩れ落ちる桃香。

ニヤリと微笑む魔女。

「これで、私が1番美しい……」

そう呟き、城へ帰った。

「……あ、壁掛け鏡かわなきゃ」

「今日も疲れましたー」

明命は、るるるん気分で歩いていた。お猫様と、たくさん触れ合えたからだ。

「今日も大量だったね、琉流」

「そうね、季衣。今日はお鍋でもしようかしら、どう思う？ 鈴々」

「鈴々は琉流の料理ならなんでもいいのだー」

季衣と琉流と鈴々が続いている。

「なんであんだだけ走り回ったのにあんなにピンピンなのよあの4人は」

桂花の問いかけに答えたのは朱里と雛里。

「うーん、なんででしょう……」

「あわわ、ただの脳筋……」

「あ！」

明命の声に、3人とも顔をあげた。

「桃香さん!!」

明命すぐさま駆けより、首筋にてをあてた。

遅れて到着した他の6人。

「どうしたの？」

と桂花。

「わかりません……脈はちゃんとあるし呼吸もしっかりしてます」

「寝てるだけ？」

琉流の発言に桂花。

「流石にいくら頭の中がお花畑だからって、手にりんご持ったまま、こんなところでは寝ないでしょ」

「そうですね……となると」

朱里が結論を言う前に雛里が喋りだした。

「他殺……」

明命がつっこむ。

「いや、死んでませんけどね」

「明命、そんなことはこの際どうでもいいのよ。」

桂花は一呼吸おいて続けた。

「重要なのは、今、ここに、巨乳の人間が一人、倒れているという事実！」

「――!!」

「――!!」

朱里と雛里に衝撃が走る。

「それがどうかしたのだ？ 桂花」

と鈴々。

「桃香ねーちゃん助けなきゃ」

「そうですね。こんな所で寝かせてたら風邪ひいちゃいます」

琉流と季衣の言葉に桂花が返す。

「わからないの？この人は、私達の恩人。しかし！その前にこいつは巨乳なのよ！！私達の敵なのよ！！！」

「んー鈴々はわからないのだ。おにーちゃんは別におっぱいの大きい人だけが好きなわけじゃないのだ。季衣と琉流も同じだと思うのだ」

「あんたたち……」

桂花の恨むような視線に

「えーっと……」

と、否定する様子もなかったので概ね同意のようだった。

「まあいいわ。そちらは鈴々、季衣、琉流。こちらは私、朱里、雛里。3対3ね。残ってるのは――」

全員の視線が――

「え！？」

明命へ向かった。

「えーっと私が決めるんですか？」

「そうです。明命ちゃんの手で、桃香さんをどうするかを決めるのです」

と朱里。

「はあ——」

ため息なのか返事なのか微妙な反応をした明命に、お互いが最後の熱弁を広げる。

まずは桂花。

「明命！貴女ならわかるはずよ、この脂肪の塊の妬ましさが！これがないだけで魅力に欠けると馬鹿にされてきた日々が！世界から敵が一人減るのよ！この好機を逃して、なにを持ってこいつに勝てるというの！」

はー、はー、と息を荒げる桂花さん。桂花さん興奮しすぎて台詞が微妙なおかしいです。

次に鈴々。

「明命は、命の恩人に手をかけるのか？武人として」

武人として、が効いたのか

「ううゝ……」

と涙目になる明命。

そりゃ究極の二択？を迫られればわからないこともないですが桂花達の選択肢は……ねえ？

桂花と鈴々に迫られる明命。

その明命を助けにきたかのように一人の男が後ろから話し掛けた。

「おい、お前ら！なにをしてる」

その声に1番びっくりしたのは桂花。

「うわ！なにによりきなり！私達は別に巨乳の命の恩人が倒れているからって放置して見殺しにしようとなんかしてないんだからね！！む、むむしろどうやって助けようか考えてたんだだからね！！」

テンパって舌をかみかみな桂花を放置して、男は名乗った。

「なんだと、その恩人をみせてみる、俺は医者だ！！」

「医者？ヤブ医者じゃないのかしら」

「俺は五斗米道の医者」

「華佗……」

「そう！俺は五斗米道の華佗」

「おねーちゃんならそこに寝てるのだ」

華佗は桃香に近づいた。

「脈も正常ですし呼吸も異常ないです」

明命の報告を受け感心する華佗。

「ほう、脈をはかったり呼吸を聞くことができるのか」

「明命は人間狩りが趣味なのだ」

その鈴々の茶化しをすぐに否定する明命。

「べ、別に趣味なんかじゃありません！」

「ん？……これは！」

「どうかしたんですか？」

と琉流。

「魔力が、宿っている」

「魔力？」

季衣が尋ねた。

「そう、魔力だ。魔法使いの呪い。多分一生このままだろう。しかし案ずるな、俺は医者だ!」

チッ。と舌打ちした桂花には誰もふれなかった。

「となると、魔女のあれが必要か……。うん、ちよっくら魔女のどこまで行ってくる」

そういつて華佗は走りだした。

「あいつ魔女の居場所知ってるの?」

桂花の問い掛けに返せる人はいなかった……

「迷ったぞー!!!」

樹海の中で叫んでみても、こだますら返ってこない。

「あゝ」

後ろから申し訳なさそうに声をかけてきたので、振り返ればメイド

が2人いた。一人は大人しそうな女の子。もうひとりはお手にとりきれない荷物を抱えた目つきの悪い女の子だ。

「こんな所で迷子でしたら、今晚のお宿くらいお貸ししますよ？」

「それはありがたい。しかし、急ぎの用事があった」

「この樹海の中で一晩お過ごしになるのですか？」

華佗の返事をきくまえに、もうひとりの目つきの悪いメイドが喋りだした。

「だめです！この樹海で一晩過ごすのは危険すぎます！」

気迫に圧倒されたのか、「あ……ああ、そうだな、そうしよう」と流れで言ってしまった華佗。

それに気づいたのか、大人しそうなメイドさんは

「あ、あのー誤解しないであげてください、この子、目が悪くて……今日の買い出しに眼鏡持って行くの忘れたんです。だから、勘違いしないでくださいね」

「月ちゃん……」

「ほら、早く帰らないと御主人様に怒られるよ？」

華佗はメイドさんの御主人様のもとへ向かった。

「その男はだれなの？」

中世ヨーロッパに建ってそうな城の中に足を踏み入れた瞬間、どこからともなく声が聞こえてきた。

「森で迷っていた人です。御主人様に合いにきたと道半ばで聞いて……」

「そうだ、是非とも協力願いたい」

「そうね、話しただけなら聞いてあげるわ。月、お茶を。亜沙、謁見の間まで連れて来なさい」

「はい」

月というメイドは、どこかへ行きだした。

亜沙というメイドは、華佗を謁見の間まで連れていった。

「ご苦労ね、亜沙、貴女もこちらへ来なさい」

華琳は、横に3人くらい入れる横長いこたつでくつろいでいた。

煎餅をたべている。

だっ広いだけの謁見の間に、わざわざ壇上に王座が置いてあるにもかかわらず、部屋の真ん中くらいに置いてある横長いこたつに入っていた。

「失礼します……」

こたつに入る亜沙。

「貴方も入れば？寒いでしょ」

「ふむ、ならば失礼しよう」

「それで、私になんの用かしら」

「そうだそうだと忘れていた。実はだな、ふもとの町で人が倒れていてな、解くには貴女の髪で作った薬が必要なんだ」

「嫌よ」

なぜだ、華佗がそう口を開くまえに華琳は続けた。

「私がかけた魔法だからよ？ 私は私より美しいものは嫌いなもの」

「お待たせしました」

と月がお茶を運んできた。

華琳はそれをすすると、続けた。

「相変わらずおいしいわ、月。……話しは戻るけど、それなら、私を魅了する何かを貴方は持ってきたっていうのかしら？」

「俺には……俺には、医術しかない……」

うなだれる華佗。

月は華琳の隣に座った。そして華佗に向かって言った。

「素晴らしい物をお持ちじゃないですか。ね、御主人様」

「そ、そうね……それは、身体のことならなんでも治せるの？」

「もちろんだ、俺は世界一の名医になる男だからな！！」

「それでは、御主人様のお体を治してください。いいですよ？ 御主人様」

と亜沙。

「そうね……」

「ああ、ところでどこがわるいんだ？」

「そ……それはいわなきゃだめなの？」

「いや、別に」

「じゃあ聞かないでくれるかしら」

華侘は華琳の後ろへ回った。

「いくぞ」

例の決め台詞が城内で響いた。

桃香はベッドに寝かせられていた。

「待たせたな！」

華侘はでていって一晩後に帰ってきた。

「それで、あったんですか？」

そう聞いた朱里に、出来上がった薬を見せて答える華侘。

桃香のもとへ行き、薬を飲ませる。

「うーん……ここは？」

「よし、もう何も心配ない！今度から、怪しい物は食うなよ」

そういつて立ち去ろうとした華侘に琉流が話しかけた。

「あの、助けてもらったお礼といってはなんですが、お料理食べて行きませんか？ご馳走しますよ？」

それに答える華侘。

「いや、気持ちだけ受け取っておこう。俺には次の病魔に苦しむ人がまっているからな……」

めでたしめでたし。

「桃香という女に負けていたのは体調が優れなかったからね」

華侘のおかげで、久々にすっきりした華琳さん。

「もう一回聞いてみようかしら」

先程買いに行かせた掛け鏡の前にたった。さっきと同一モデルの2倍はあろうかという大きさに満足しながら、鏡に魔法をかける。

「ちちんぷいぷいちちんぷーい。鏡よ鏡よ鏡さん、この世で1番美しいのはだーれだ」

すると鏡の中の華琳さんの髪が伸びてきた。そして鏡の中の華琳さんは答えた。

「あらあら、いいことを聞いてくださいましたわ。それは、わたしでございましてよ」

「あら、やっぱり私が1番なのね」

「なにをいつてらっしゃるのかしらこのちんちくりんは。この世で1番美しいのは、この私！袁本初に決まっていますわ、おーっほっほ」

鏡の中でばっちりポーズを決める麗羽さん。

「なんで貴女がここに……」

「先程は、鏡の大きさがちいさかったので、美羽さんにお譲りしただけですわ。この大きこそ、わたくしに相応しいとおもわ……」

台詞の途中だというのに華琳さんは鏡を割りにかかった。

割れた鏡から「なんなんですか？ まったく……」と聞こえたきり、

なにも聞こえなくなった。

「もう二度と！」

「鏡に魔法なんかかけないんだから……！」

めでたし？めでたし！

しらゆきひめ1（後書き）

うん、あの後一刀さんはきっちり華琳さんにしぼられました。色々。

さて、この話しについての的な事を後書きで書こうかなと思ってたんですけど、ね。

特に何もないという件。

配置の順番としては

華琳さんが最初ですね。魔女コスにニヤニヤしたいだけです。

そして美羽ちゃん。華琳さんコスが可愛い

次に桃香さん。りんごたべてくれそうなのが彼女しかいなかった。

んで、小人。桂花と雛里、朱里、明命だけ決まってた。3人は適当に。

で、話を繋ぐためだけの華侘。アニメでありましたね、華琳さんのお通じがこないネタ。

華侘さん迷わせてしまったので急きよ月と亜沙が参加。

月はデフォで亜沙は萌将で華琳さんに狙われてたんで。

で麗羽は最後まで考えてなかった。

書き終わるくらいのにひらめいたので採用。

そんな感じですかね。

ももたろう1（前書き）

「どうして私があんな恥ずかしい台詞を言わなきゃいけないのかしら」

舞台裏で華琳さんはぶんすか怒っていた。

おもむろに何かを考えている華琳さん。どうやらどうすれば一刀に仕返しをできるか考えているらしい。

「ん？」

ふと華琳さんの視界に入ってきた紙束に華琳さんは近づいた。

「これは……1週間後の台本？」

ペラペラとめくりながら、配役を見つけた。

ふーん。司会は星か……、ということは一刀は……ふむ。その役ね。

ニヤリと華琳さんは不気味に微笑み、ペンをとりだした。

これでよし、一刀の事だし当日までこれはこのままでしょうね。後はこれを当日に星がとりそのまま事が運ぶのをまつだけ……面白くなりそうね。

ももたろう1

昔々そのまた昔のお話。今回は趙子龍が読ませていただく。

あるところに、おじいさんとおばあさ……トスツ、といい音がして星の前髪がひらひらと舞った。

「な、なにをする、いきなり」

星は舞台の紫苑と一刀を見た。紫苑は弓を持っていた。

「いえいえ、星ちゃんが台詞を間違えていた気がしたので」

「そうか？ 私はキチンと読んでいたはずだが？」

「いえいえ、こんな綺麗なお姉さんとご主人さまを捕まえて、老婆と老爺はいくらなんでも……ね、ご主人様？」

鬼気迫る紫苑に、無言で縦に首を振るしかない一刀。

「ふむ、それもそうだな。では、仕切りなおして……あるところにおじさんとおばさ……」

今度はまつげが舞った、気がした。

「だれが、淑女なんですか？ 星ちゃん？」

流石に身の危険を察知したのか、星は無言でもう一度やり直した。

「あるところに割とカッコいいお兄様と凄く綺麗なお姉さまがいました。割とカッコいいお兄様は、山へしばかれに」

「え!？」

と面食らう一刀。

「どうなされた主。早く山へしばかれに行きなさっては？」

「え……、だってそこ……」

一刀が書いた台本では普通に「しばかりに」となっていたはずだ。なのに今、星が言ったのは確実に「しばかれに」だ。

「ご主人さま? 早く行かれては? 話がすみませんよ」

と隣にいた紫苑にせかされたので、とりあえず立ち上がり星に向かって話す。

「ところで、山にいるのは誰なんだ？」

一応、覚悟的なものはしておかなければなるまい。そんな一刀を地獄に葬る返しがまっていた。

「ふむ、山賊の配役は……と」

星が一番最後のページを開いた。

「ふむ、桂花、思春、詠、音々音、焰耶、華琳、だな」

「死ぬ……」

一刀はそう呟き、とぼとぼ舞台から歩きだした。

「続けるか、綺麗過ぎて誰も近寄れないくらい綺麗なお姉さんは川へ洗濯にいきました」

「星ちゃん、それは嫌味なの？」

紫苑は問いかけたが、星が答えることはなかった。

「そこへ、どんぶらこっこどんぶらこっこ何やら巨大な桃が流れてきました。綺麗なお姉さんは、不審げにそれを見ていましたが、桃がおいしそうだったので、拾ってしまいました」

「人を食いしんぼうみたいに言わないでくれるかしら？ 星ちゃん？」

「こほん、綺麗なお姉さんはそれを家に持って帰って、お兄さんと一緒に食べるつもりでしたが、お兄さんがいつまでたっても帰ってこないの、待ち切れず桃をわってしまいました」

「そろそろ本腰いれてキレていいかしら？」

「しかし、綺麗なお姉さんは驚愕しました。……ほら、驚いた顔をして下され紫苑殿」

驚いた顔をする紫苑。

「そこには小さな女の子がいたのです」

「璃々は、ももたろうだよ」

半分に割れた桃から璃々が自己紹介をした。

「あらあら、可愛いももたろうさんね」

「綺麗なお姉さんはそう言って、ももたろうをそだてることにしました。ももたろうも、やさしくてきれいなお姉さんにだんだん家族愛を覚えてきたころ、悲劇は起こった」

「ももたろうが朝起きると、綺麗な綺麗なお姉さんが、家からいなくなっていたのです!!」

「代わりに、手紙が一通、璃々……じゃなかった、ももたろう。助けて、鬼さんたちに捕まっちゃったの。そういう内容の書置きがあった。……いろいろ突っ込みたい」

「そこで!ももたろうは綺麗なお姉さんを取り戻すために、旅を始めたのです」

「璃々ももたろうさんは、鬼さんから、お母さんを取り戻すんだから!!」

「書置きとともにあったきび団子3つを持って、ももたろうの旅は、幕を開けた。」

ももたろうが歩いていると、前から飴を持った人がやってきました。

「おやゝ璃々ちゃん、こんなところでどうしたんですかゝ」

「あゝ！風さんだゝこんにちは」

ぺこりと頭を下げる璃々。

「嬢ちゃん、うちの風の話しをきいてやってくれよ」

あたまの上のそれがしゃべった。

「すごい！お人形さんがしゃべってるゝ」

「おうおう、おれっちは人形じゃなくて宝慧ってんだ」

「はゝい」

「ところで璃々ちゃんは何をしてたんですかゝ」

ともう一度風が尋ねた。

「んゝとね、璃々ももたろうさんは、お母さんを助けに行くのゝ」

「それはそれは、たいへんですねゝ」

「だから、風さんたちにも手伝ってもらいなさいって手紙が」
璃々は書置きを見せた。

「どうするよ、風」

「まあ、いいんじゃないんですか？ 暇ですし」

こうして、風が仲間になった。

さらに歩いていると、二人組が歩いてきた。

「なの～暇なのじゃ～」

「美羽様、そんなこと言っても面白いものは落ちてませんよ」

「む～……おお！」

美羽は璃々達を見つけた。

「璃々ではないか。このようなところでお主は何をしておるのじゃ」

「あ～美羽ちゃんだ～。あのね～璃々もたろうさんはね～、鬼退治～」

「お、おにたいじとな」

「うん」

「お主はわからんのう」

行くぞよ。と七乃に声をかけて立ち去ろうとした美羽に、七乃が声をかけた。

「でもでも美羽様。鬼退治に行くと、鬼たちがため込んだ蜂蜜がたぐんまり、あるかもしれませんよ?」

ぴたり、足が止まる。

「だから私たちも行きませんか?美羽様」

「む、むう、ま、まあ七乃が行くなら、妾もゆくぞよ」

こうして七乃と美羽が仲間になった。

「七乃さんもなかなかやりますね」

と風。

「美羽様は、私の婚約者ですからね」

「それは、秘密の花園ってやつか?嬢ちゃん」

「ふふ、冗談ですよ冗談。まあ、体は美羽様と一刀さんのものです」

けどね」

「お兄さんの体は、譲りませんよ?」

「あらら、一刀さんもモテモテですね」

そのころのモテモテ一刀さん。

「ちょ、お前らマジでやめろ。いや、やめてください」

「このメンツでそれはむりね」

華琳が冷静に言う。

「ていうかなんでこのメンツに華琳がいるんだ……」

「あら、そんなの決まってるじゃない、わたしが……仕込んだからよ?」

「おまえかあああつあああつあああ」

「さあ、者どもこいつに日ごろの恨みをぶつけるのよ」

「まじで冗談になんねえからあああつあああああああああああ」

モテモテ一刀さんは、全治1カ月でした。

「ここが、鬼が島？」

飴を持っている風。

七乃の背中で疲れて寝ている美羽。

美羽を背負っている七乃。

言った当人のももたろう。

4人の目の前には、手作り感満載の城がある。ていうかはりぼて。

「たのも」

ももたろうがそう叫ぶと、鬼と、綺麗なお兄さんが出てきた。ていうかはりぼてだしでてこざるをえない。

「お母さん!!」

ももたろうの視線の先に囚われた綺麗なお姉さんがいた。気がしたけど、別にきれいなお姉さんはつながれてなかった。それに今更だが綺麗なお姉さんはそんなにきれいじゃない。

「ももたろう、よくぞやってきたにゃ！きょうはお前をたおしてははしやまを私たちだけのものにするにゃ、かくごするのにゃ」

「にゃー！」

「そうだにゃ」

「……にゃん」

鬼は、美以、ミケ、トラ、シャムだった。

じーっとにらみ合う……という迫力には欠けているので、見つめあう両者。

「美羽様くつきましたよ」

「んー七乃が膝枕してくれるならもう少しで起きそうじゃ」

「しょうがないですね」

膝をついた七乃。

美羽はもちろん膝にきたのだが、七乃の膝にもう一つあたまの感触が増えた。

「……枕、にゃん」

「あらあらお嬢様が一人増えましたね」

「こらゝシヤム！なにやってるのにゃ！ははしゃまの膝があるのにゃ！」

抗議をする美以の声はすでに、シヤムの耳には聞こえていないようだ。スースーと寝息を立てている。

「甘い匂いがするにゃ」

「あれにゃ」

ミケとトラの視線の先には、風。

「んゝこっちへきたらあめちゃんをあげましょゝ」

「ほんとかにゃ」

「いくにゃ、いくにゃ」

とてとて、と走り出す2人。

「ミケとトラもいくなにゃ！おいしいものは、ははしゃまがいくらでもつくってくれるのにゃゝ」

「もう降参したらどうなの！」

ももたろうは降参するように鬼に話しかける。

「いやなのにな、ははしゃまはわたさないのにな」

ふたりが言い合っていると、

「うゝん、騒がしいのゝ」

と美羽が起きた。

「んゝ……………」

目をこすっている美羽。

「おお、孟獲ではないか」

「おお、えんじゅちゅにな」

「ふわあ、ん お主はこんなところで何をしておるのじゃ」

「おにな」

「おに？そんなことより、この前の王様ごっこの続きをするぞよ、お主もするであろ？」

「王様ごっこ？やるのにな！」

美羽と美以はバタバタとどこかへ走り出した。

こうして、鬼側の不戦により、ももたろうは、お母さんを取りもどしましたとき。

めでたしめでたし。

ももたろう1（後書き）

ね、なんというか。

完全に自己満。

紫苑がおばあさんという設定でやりたかったから

ももたろうが璃々

鬼はまあももたろうが璃々だしな〜とか思ってたら

萌将で紫苑取り合いしてたんでそれでいいかなと。

まあ恋や明命が仲間でもよかったかな〜と。いまさら。

よく知らないキャラをうごかすのはやはりつらい。

風さんとかさ〜。

とりあえず美羽可愛い。

璃々が自分の事を璃々ももたろうさんは、っていうのに萌えた

自分で書いていてにやにやしてた。

璃々ももたろうさんは、全国のロリコンさんを退治に行きます。

ていうかむしろきてください（笑

うん。美以でも美羽でもいい。

あ……きび団子はスタッフが美味しくいただきました。べ、べつに忘れてたとかそんなんじゃないんだからね！！勘違いしないでよね！！！！

はいごめんなちゃいな

ヘンゼルとグレーテル（前書き）

「まったく、星ちゃんのいたずら好きには困ったわ……」

ちゃんと台本を読んでいただけの星に何やらお怒りの紫苑さん。

「あれは何かしら……」

紫苑さんが見つけたのは……

「ヘンゼルとグレーテルの進行役用の台本？ 確か次の演劇だったかしら」

そして、紫苑さんがニヤリ、と不吉に微笑んだ気がした。きっと気のせいだよね。

「あ、紫苑さん」

紫苑をみつけて声をかけてきたのは……

「あら、穩ちゃん」

穩である。走っていたのか、息が上がっている。

「はあ、はあ、紫苑さん、この辺で、ヘンゼルと、グレーテルの、台本みませんで、したか？次の演劇の、進行役を、まかされたのに、落としちゃって」

「あら、穩ちゃんが次の進行役だったのね。はい」

と台本を差し出す紫苑。

「あ、ありがとうございます！」

礼をして、去っていく穩。

「あとは、前の配役の人に、変更を伝えるだけね……」

紫苑さん、なんか黒いですよ？

ヘンゼルとグレーテル

「むかしむかしあるところに夫婦がいました。その夫婦には子供が二人いました。兄をヘンゼル、妹の名をグレーテル、と言いました」

ここまで読んだところで、舞台裏から、おじいさん役の人が、

「ついに私の出番か〜！」

ときけんでいました。少しお怒り気味の穏は、台本にないことを言い始めた。

「しかし、平穏なひと時は、そう長くは続かなかったのです」

「なんと、父親が、事故死したのです！」

「何だと〜!!！」

台本にない展開に驚く父親役。

そして舞台に現れる、母親役とヘンゼル役とグレーテル役。3人で会話を始めた。

「そう、あれは悲しい……事故じゃったな」

と祭。

「そうねお母様、私は悲しいわ。ひざ丈の川で溺死ができるお父様

が父親だったなんて、ぐすっ」

と紫苑。

「泣くなグレーテル、華雄お父さんは私たちの心に生きて……いなくとも、誰かの心に、きっと生きているさ……きつとな」

と桔梗。

「お兄様……そうですね、だんだんと影が薄くなるような人でも、誰かおぼえてますよね、私たち以外の誰かが」

「さあ、家に帰りましょう」

「そう、悲劇の始まりは、そこからでした」と穏。

「ある日、母親がこんな提案をしました」

「ヘンゼル、グレーテル、西の山に苺摘みをしてきてくれないかしら」

「わかりましたお母様。行こうか！お兄様」

「ヘンゼルとグレーテルは西の山に苺摘みにいきました。しかし、それは母親の口を減らすための罠だったのです」

「ごめんね、ヘンゼル、グレーテル、華なんとかさんがいなくなつて、稼ぎがなくての」

「ヘンゼルとグレーテルは、西の山にやってきました」

「お兄様、あれ」

「グレーテルの指差した先には、魔女と猫耳をつけた小人がいました。なにやら小人の一人と魔女が話しているようです」

「静かに、グレーテル」

「なにを思ったのかグレーテル達は話が聞こえる距離まで近づいて行きました」

「それで、これをリンゴに仕込んで、食べさせればいいわけね？」

「そうです魔女さん。そうすれば、私の憎き巨乳が一人滅し、貴方はこの森の一带を手に入れれる」

「悪くない取引ね」

「じゃあよろしく願いしますよ？」

「そういつて小人は去って行きました。魔女もいぶかしげに葉を見つめながら去って行った」

「お兄様、さっきのは？」

「グレーテルの問いかけに、ヘンゼルは答えました」

「闇の取引……私たちには関係ないな」

「そうですか」

「ヘンゼルとグレーテルは、苺摘みというか苺探しを再開しました」

「お兄様、あれ」

「またもやグレーテルの指さす先には、なにやら不思議なものがありました。二人は近づいていきます」

「お菓子の家……だな」

「お菓子の家……ですね」

「二人が咄然としている視線の先には、雑多のお菓子でできたお菓子の家がありました」

「これを食べろというのか」

「台本にはそう書いていますね」

「じゃあたべるか」

「ヘンゼルは、チョコの扉を、グレーテルは砂糖菓子の窓を食べていました」

「何奴!!」

「そこへやってきたのは変な仮面をつけた人。そう、この家は華蝶仮面の作った家だったのです」

「お主ら！私の家をこわしたのか！」

「華蝶仮面は有無を言わず、ヘンゼルとグレーテルに、魔法をかけてしまいました」

「お主らには、束縛の魔法をかけさせてもらった。この家を壊した罰に、一生ここで働いてもらうからな」

「そんな理不尽な罰を受け入れざるを得なかった2人。こうして悪い華蝶仮面につかまってしまったのです」

「飯が不味いだの風呂が熱いだの部屋が汚いだの仕事が遅いだの傍若無人を尽くした華蝶仮面。ヘンゼルとグレーテルは耐えかねたのです。歴史が証明している通り、上から押さえつけられた平民は、いつの日か怒りが爆発し、反乱をおこすのです」

「ヘンゼル、お前はまきを割ってくべてこい。グレーテルはいつも通り、飯だ」

「はい。というしかない2人」

「仮面様、お鍋の水の上にきらきら光るものがあります」

「ゴミか？捨てろ」

「いえ、宝石のようなきらめきです」

「がたっ、と椅子を蹴飛ばして鍋の上を確認しに行く華蝶仮面。鍋の前には一人立てる広さしかないとため斜め後ろに下がるグレーテル」

「ヘンゼルは、華蝶仮面の声で異変に気付いた。換気口のポ●キーのような形状の格子から、うわっ、という声が聞こえたのだ」

「急いで入口から家の中に入って、状況確かめるヘンゼル」

「な、何をする貴様」

「家の中ではグレーテルと華蝶仮面が取っ組み合いをしていた」

「お兄様、手伝ってください、この仮面を茹で殺すのです」

「ヘンゼルは、急いで加勢しました」

「主ら、これは割と冗談ではすまされないぞ？」

「大丈夫ですよ星ちゃん。まだ少し熱いくらいのお風呂ですから」

「すまん、星よ、まきは沢山くべてきてしまった」

「くうう、無念」

「ぱっしゅん。と音を立てて戦いに終止符がうたれた」

「あっつ~~~~~!!!!!!」

「こうしてヘンゼルとグレーテルは華蝶仮面の束縛から逃れ、華蝶仮面のため込んでいた宝石を持って家へ帰りました。その後、ヘンゼルとグレーテルと母親は、その宝石を売って生活費を作り一生父親のことなんか思い出さずにくらしましたとさ。めでたしめでたし」

ヘンゼルとグレーテル（後書き）

おっばいおっばい

そんな回なので、テンションあがりませんでした。

魔女と猫耳小人の話はねーい思いついた（笑
あと華雄さんはこんな感じで扱っていきます。次の出番があるかは別としてね。

魔女じゃなくて華蝶仮面なのは星さんだから。

ちなみに配置変えされるまえのキャストは以下の通り。

父親、雪蓮

母親、冥琳

ヘンゼル、愛紗

グレーテル、鈴々

魔女、華琳（まてえ

今回の学びました。

私におっばい回は無理だと。

やっぱり自分が好きなものをすきなように書くべきだね

ではでは 来週のCinderellaのあとがきでお会いしましょう。

一刀さん復帰まであと3週

シンデレラ（前書き）

「くっそ〜陸遜のやつ、私を無視しおって〜」

一人で怒っているのは華雄。そんな華雄はこれまでの前書きの例にもれず、台本を手に入れた。

「これは来週の……ニヤリ」

「ご主人様、どうかしましたか？みんなをここに呼んだりして」

「いや、来週の演劇を諸事情により変えようかと……これは俺が出たい演劇でもあるしな」

「じゃあ決まりですね」

「というわけでこれが新しい台本だ。みんな、よろしく」

こうして、華雄以外には、演劇の変更がつたわった。華雄につたわったのは当日。

残念。

シンデレラ

昔々、あるところに4人の姉妹が住んでいました。

その姉妹、上3人は実の姉妹、下の一人は義理の姉妹でした。

母親が居たのですが、上3人の姉妹の策略により、旅行に行ったとき、音沙汰がなくなったのです。

3姉妹はそれをいいことに、一番下の妹をいじめ倒していました。

ある時、一通の手紙が姉妹の家に届きました。

「おねーさま」

ぱたぱた、と走ってきた次女に長女が問いかける。

「あらあら、どうしたの？ 雛里さん？」

「と、桃香お姉さま、これを」

長女は、はあはあと息を整えている次女から手紙を受け取ると、じつくり読みだした。

「えーっと、今晚、私の城にて、舞踏会をお開きいたします。我が名門の次期当主、猪々子も参加いたしますので、是非領内の方々、お参加願えるようお手紙を出させていただきました……。ってこれ大変な手紙じゃないの雛里さん！！」

「お姉さま、それはさっき伝えましたよ……」

「それでは、3人で向かいましょう。斗詩、ドレスの支度を。雛里さんは明命さんを読んできなさい」

長女がそういうと、次女は三女を探しに、小汚い服をつけた末っ子が、3人のドレスを持って来た。

「あれ〜？このドレス汚れてませんか〜？」

「気のせいだと思います。さっきまでちゃんと外に干してましたから」

「じゃあ、持ってくる途中によごれたんですね。きっとそうですよ。斗詩さんもそう思いませんか？」

にこにこしながらいびっている長女。そんな長女の小言に耐えていると、次女と三女がやってきた。

「お姉さま、どうかしましたか？」

「あゝ明命さん。舞踏会に行きますよ」

「舞踏会ですか？行きます！」

二つ返事で返した三女。

3人はドレスを来て、外へ出た。そして、長女は末っ子に向かって

言った。

「では斗詩さん、夕飯の支度はお任せしましたよ」

次に次女、

「あ、斗詩さんにお願いが、暖炉の中に私のお気に入りの指輪を落としてしまって……探しておいてください」

そして三女、

「また、猫がにげたみたいです。東の森にいますから、探して捕まえておいてください」

3人はそれぞれ、末っ子に、頼みごとをして、舞踏会に向かった。

「はあ……舞踏会か……行きたいなあ」

「まずは、夕食ね」

末っ子が食糧庫を覗くと、そこにはかぼちゃが一つ、それしか残っていないかった。流石に、かぼちゃ1つでは夕飯は何もできない。町まで、買い出しに行かなければならない。

「それと、指輪」

次女に頼まれた指輪を煤けた暖炉で探した。数分後、指輪を見つけたのはいいが、末っ子は灰で、真っ黒になってしまった。今の季節、そんなに温かいわけではないので、洗うには、水を火にくべなければならぬ。

「あとは、猫」

猫が森にいる。森にいる猫を探すというのは考えるだけで、無謀にも思えてくる。

「はあ……やっぱりどう頑張っても舞踏会には間に合わないなあ」

もし、もしも間に合えば、行けたかも知れない。きている服が、舞

踏会の雰囲気とはかけ離れているのだが。

「……いききたいのか？」

「え？」

どこからともなく聞こえてくる声。

「舞踏会に行きたいのかと聞いておるのじゃ」

「も、もちろんです」

「ならば、外へ出てくるがよいぞ。かぼちゃと指輪をもってな」

末っ子が言われた通りかぼちゃと指輪を持って外へ出てみると、そこには金髪ツインテールの少女が立っていた。

「貴女は……？」

「妾は、魔法少女 リリカル はな☆リン なのじゃ」

美羽様可愛いゝさすが傾国の美少女ゝ、こ、こほん。いきなり現れた自称魔法少女に、戸惑う末っ子。

「魔法？何ですかそれ」

「百聞は一見に如かずなのじゃ、それ」

魔法少女は、腕を上げると、呪文を唱え始めました。

「りくらくらつくくらいつく、えまたりおよみかのずろよおや」

きやく美羽様天才ですくその台詞をかまずにいえるとかくさすが袁公……こほん、すると末っ子の周りが光に包まれ、一瞬みえなくなりました。

そして、光が収まる頃、そこには、シンデレラと化した末っ子と、かぼちゃの馬車がありました。

「変身の途中に猫が入って来たので馬になったのじゃ」

「なぐんで美以が馬なのにゃ、美以は人間なのにゃ」

「文句を言わずにはしるがよい」

こうして、シンデレラは城へ向かいました。

「この魔法は12じまでなのじゃ」

「ありがとうございます！鼻りんさくん」

舞踏会は、とても華やかで、シンデレラは、こんなところに私なんかが、と思っていました。

しかし、その考えはすぐにかき消されます。

「お嬢様、私と、踊りませんか？」

王子に踊りに誘われたのです。

「私なんかでよかったら」

さすがは王子、エスコートが上手い、初心者で、免疫もないシンデレラは、時を忘れ、王子のそばにいました。しかし、幸せな時はそう長く続くはずありません。

12時の終了の5分前の予鈴がなったのです。ここからみんなは、今日の舞踏会のよかった相手と、連絡先を交換したりします。もちろん、シンデレラは我にかえります。魔法少女の言葉を思い出したのです。

「お嬢さん」

王子のそんな声かけを無視するように、シンデレラは駆け出しました。

長い廊下を駆け、螺旋階段を半ば飛び降りるように下り、出口の扉に体当たりするように開いて、そこから扇状に広がる階段を下っている途中、悲劇は起こった。

効果音であらわすと、ぐきり。足首をひねって態勢を崩し、ボタンボタンと階段を転げるシンデレラ。

「大丈夫か!!」

王子が駆け寄ってくるのが早いかシンデレラは、振り払うようにしてかぼちゃの馬車に飛び乗り、家へ向かいました。ガラスの靴をおとしたのも気付かずに。

数日後、相変わらず、いびられている末っ子のもとに、王子の一人がやってきました。

「あらあら、王子さまがこんなところになんのようにですか？」

「このガラスの靴をぴったりはけるご婦人を探しに来た。その人と私は婚約をする」

その発言に、上の3人は、私が私かと挑戦しましたが、小さかったり、大きかったりで、はけませんでした。

「つぎはあなただ」

「わ、私……ですか？」

「こんな胸がでかいだけの人に、そんな靴がはけるわけないじゃない

い」

三女がひどいことっています。

「見栄えは関係ない、私は、この靴の婦人と踊った時、心の底からつながれるような気がした。そう、恋をしたのだ」

もちろん、シンデレラの落とした靴なのですから、末っ子にはけな
いわけがありません。

こうして、末っ子は、王子の妃となり幸せに過ごしましたとき。めでたしめでたし。

「なりませぬわ!!」

バーン!と扉を開いたのは麗羽。

「お母様!」

「我が名門袁家の次期当主の猪々子が、こんな馬の骨ともしれぬ輩と婚約するだなんて」

「お母様、私たちが優秀だったら、私たちは王子の御親戚になれるんですね?」

長女の確かめるような口調に、もちろん。と返事をする王子のお母様。

「王子は軍を動かす、その才がなければ親族なんて笑われます」

「それなら雛里さんが」

「ならば、猪々子と勝負」

もちろん、雛里が負けるはずもなく。

「きく、しかし、うちの猪々子は武勇にもすぐれて」

「うちの明命さんもぶゆうにすぐれて」

「ならば勝負」

まあ、接戦といえば接戦だったんだけど、森の近くで勝負したのが

運のつき。

「むむむ、そうですね！！名門袁家の象徴といえど！この！！高笑い！！！！親族といえどできなければなりませんわ、ですわよね？美羽さん？」

「そ、そうなのじゃ」

「えーっと、こうですか？おーほっほっほ」

桃香がしたその高笑い。麗羽は気に入ったのか、2人の婚約にとやかく言わなくなりましたとき、めでたしめでたし。

シンデレラ（後書き）

今回のナレーターは、七乃さんでした。

個人的なピークは 魔法少女リリカル ハナ☆りん のところですね。

言わずもがな ナノ破産

あと はなりん 微妙に まどか☆マギカ の ひらがな☆カタカナ

それに

リククララックライラック は、エヴァたんのあれ。なんだけ。魔法つかうときに必要なセリフ。

斗詩がシンデレラなのは、ため息が似合ったから。斗詩がシンデレラなら王子はもちろん猪々子

お姉さまたちは何となく。

腹黒そうなのつまんできたけど発揮できず……

かずとさん復帰一発目は私の願望に満ち溢れた話を書こうかな。

復帰まであと2週？だよね？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5674q/>

真恋姫＋夢想 三国演義

2011年10月8日15時18分発行